eye

緩和ケア病棟で「写真療法」
「終末の命」輝く瞬間を

カメラを持つ手がこわばり、脇に汗をかく。今年の6月11日、レンズの向こうでは、NTT東日本関東病院の緩和ケア病棟で闘病するジョイ広田さん(83)と娘の鈴木弘美さん(63)がほほ笑んだ。「最後の写真」を撮る私の強い緊張感を2人の笑顔がほどいてくれた。

NPO日本写真療法家協会の酒井貴子代表(52)が05年から続ける同病棟での写真療法のボランティア活動に4月から参加した。ボランティアコーディネーターの紺和雄さん(75)と酒井さんが患者の写真を撮り、プリントして本人に渡す活動。2人が撮影した患者は180人を超える。

活動を続ける中で、酒井さんには忘れられない出会いがある。06年10月に肺がんのため65歳で亡くなった田口和子さん。何度も写真に納まった田口さんは、撮影が終わるたび、「私の新しい遺影だよ」とうれしそうに周囲に話したという。どの写真の田口さんもおしゃれな服装でにっこりと笑っている。

「葬儀には入院中の写真をたくさん飾ったんですよ」。娘の理恵さんは、いとおしそうに遺影に触れながら話してくれた。

「死ぬために病棟に来たが、もう一度今を生きたい」と田口さんが変わっていったと語る酒井さん。患者の笑顔に生命が輝く瞬間を見るようになった。写真を撮られる患者。写真を撮る自分。写真を見る遺族。それぞれを癒やす写真の力を酒井さんは感じている。

7月23日に広田さんが永眠したことを鈴木さんとの電話で知った。写真を見て「うれしい」とつぶやいた広田さんの声が耳を離れない。今、広田さんの写真を撮ったことで、私自身が癒やされたことを身をもって知った。

写真・文 梅村直承

■「2010年毎日写真コンテスト」作品募集 ドキュメント、ファミリー、小学生、中学生、高校生の5部門。11月1日必着。詳しくは同事務局（03・3213・4620）か日報連のホームページ（http://nipponren.jp/）で。

和やかな雰囲気の中、撮影に臨む酒井さん（左端）と紺さん（左から2人目）＝9月17日

病室でカメラを前に笑顔を見せるジョイ広田さん（右）と娘の鈴木弘美さん
＝東京都品川区のＮＴＴ東日本関東病院で６月11日

田口和子さんの遺影を手に穏やかな表情をみせる娘の理恵さん＝川崎市麻生区で7月25日

酒井さんが撮影した患者たち。すてきな笑顔が並ぶ

緩和ケアと写真セラピー

緩和ケアは末期がんなどの患者の身体的、精神的な苦痛を和らげる専門的な治療、看護のこと。NTT東日本関東病院の緩和ケア病棟では、患者や家族に多角的に対応するために音楽療法や化粧の癒やし効果を使うメーキャップ療法などと共に、05年7月から酒井さんの写真療法（写真セラピー）を取り入れた。

写真療法は、病棟の談話室や病室で希望する患者の写真を撮る。カーディガンを羽織ったり、スカーフを巻くなどし、パジャマや治療用の管などを隠す工夫をする。多くの人が家族と共に撮影に臨むという。プリントを本人に渡し、家族と写真を楽しむことができる。

同病院の堀夏樹・緩和ケア科部長(59)は「病気が悪化する中、自分を見失う患者が多い。客観的に写真の自分を見ることで、今を生きる自分を取り戻すことができる。また、家族との関係を再認識し、自信にもつながる。写真を介したコミュニケーションもできる」と期待を寄せる。